

やまのべ 偉人伝心 (安達峰一郎編)

15. 日仏通商航海条約を改正し革命最中のメキシコに赴任した安達峰一郎

●鏡子夫人の活躍

ポーツマスから帰国した峰一郎は、外務省の課長や参事官などの要職につきながらしばらく国内で過ごしました。その間、鏡子夫人は、ヨーロッパ生活の体験者としての見識が認められ、宮内省から“東宮職御用掛”、さらに“皇后職御用掛”を拝命しました。(※東宮は皇太子)

一方、峰一郎は明治41(1908)年、日仏通商航海条約改正の用務によりフランス勤務を命じられました。交渉はかなり難航しましたが、同44(1911)年によく調印。その功績が認められ、大正元(1912)年従四位に叙せられ、勲一等瑞宝章が授与されました。

●革命下のメキシコ公使

フランスから帰国してまもなくの、大正2(1913)年に峰一郎はメキシコ公使に任命されました。当時メキシコは半植民地状況から抜け出すための革命期で、アメリカからの介入もあり国内の覇権争いが激しく内乱状態でしたが、アメリカの干渉に対する反米感情もあって、大国ロシアに勝利した日本に対しては異常なほどの親日ムードで安達公使を迎えてくれました。峰一郎はメキシコに好意をもって望みましたが、日本政府は日米関係重視の方針だったので、峰一郎の意向は通じませんでした。

メキシコ在任中、峰一郎の要請によりようやく実現した軍艦“出雲”が、メキシコのマンサニョ港に到着したので、艦長を表敬訪問しました。その帰途、峰一郎一行が乗った列車が駅に停車するたびに反乱軍に狙撃されるので、サユラという小さな駅で下車し、この村の村長宅で救助を待っている旨を公使館に連絡しようと何度も電話をしましたが不通。やがて“安達公使・行方不明”と、新聞で報じられました。決死の捜索隊が一行と合流したのは10日も経った後でした。

ようやく救助されたとはいえ、鉄道が破壊されたため、3日間も山野を歩いた後に、車や列車を乗り継いで、遭難から2週間後、ようやく首都のメキシコ市にたどり着いたのでした。そのためか、帰ってまもなく重い風土病にかかり容態が悪化。

一時は死をも覚悟して、日本の友人に『遺言状』を送ったほどでした。

3カ月後に医師を替



メキシコで歓迎される峰一郎

えてから快方に向かい、翌年の夏には長旅ができるまでに回復。病気療養のため大正4(1915)年8月末に、メキシコを離れて帰国の途につきました。静養の結果、体調は元に戻り、翌年にメキシコ公使を免じられました。

●ロシア革命直前のロシアへ

同年の年末、日露戦争の後、日本との関係が良好になったロシアから皇族のミハロウィッチ大公が大正天皇の即位式典無事終了の祝賀と、第一次世界大戦開戦以来の日本の援助に対する御礼のため来日されたので、フランス語の上手な峰一郎が接伴役に任命されました。大公の日本滞在中、1カ月にわたり随行し、翌年には、その答礼および親善使節としてロシアへ差遣された閑院宮載仁親王の随行を仰せつけられ、ロシア革命直前のロシアを視察してきたのでした。

●外国在任中の父母の死

峰一郎は外交官として、外国勤務がほとんどだったので帰国した時に住む家を借りるなどしていましたが、この頃になってようやく渋谷区常盤町の由緒ある邸宅を購入して、年老いた父母も呼び、家族が住むようになったようです。

昭和5(1930)年、常設国際司法裁判所の判事に立候補するためヨーロッパに出かける前に詠った幾つかの和歌に、“常盤松”とよく書いてあるのはこの邸宅です。峰一郎の両親は大正5(1916)年春に帰郷し、父は大正7(1918)年に山辺の自宅で亡くなりました(享年71歳)。その後、母は再び上京し、昭和3(1928)年に常盤の邸宅で亡くなりました(享年80歳)。いずれも峰一郎がヨーロッパ在任中のことでした。

文：山辺町ふるさと資料館長 佐藤継雄